駒場友の会

会報第12号

南米のマンドリン音楽 レクチャー・コンサート

昨年十一月一日(土)マンドリン奏者リカルド・サンドバルによるレクチャー・コンサートが九〇〇番教室で開催されました。サンドバルは南米ベネズエラの出身。ドイツのケルン音楽院を卒業し、数々の賞を受賞。現在はフランスに住みながら、隣国ルクセンブルグの音楽院で教鞭をとっています。伴奏ギターのマチア・コレーは、フランス出身。欧州の音大でラテンアメリカ音楽の演奏法を極めた俊英です。

超一流のクラシック音楽演奏家であるふたりが、今回は中南米のポピュラー音楽の曲目を準備して来日しました。駒場友の会の主催によって実現したレクチャー・コンサートには、五〇〇名近い聴衆が集まりました。学外からの方、若い世代も多く、会場を埋めた聴衆は、ラテンアメリカ独特のリズムの説明を受け、手拍子で演奏に参加し、南米の音楽の熱気を共有しました。アンコールで演奏された郷愁ただようメロディでは、会場が静まり返りました。クラシックの美学で磨きぬかれた中南米民衆文化の精髄、サンドバルとコレーが奏でた弦は、駒場キャンパスに親密な余韻を残していきました。

聴衆の熱望にこたえ、来たる十月二十三日(金)サンドバルとコレーを再度駒場に招いて、駒場友の会主催のコンサートを開く予定です。次回は、小規模の会場で、生音のみのコンサートをじっくりお聴きいただきます。詳しくは追ってお知らせをいたします。

駒場の樹木をめぐる講演会とイベント

二〇〇八年度のホームカミングデイが、十一月十五日(土)に開催され、その一つの行事として、駒場友の会主催による駒場の樹木をめぐる講演会が、駒場コミュニケーションプラザで行われました。この講演会も本年で四回目になります。講演は今年度も、大学院農学生命科学研究科教授・北海道演習林長の梶幹男先生にお願いしました。今回の題目は「温暖化と樹木・森林：後氷期気候変動と樹木の分布に関する研究から」でした。内容は、昨年までの「ことはじめ」シリーズとは異なり、現在注目を集めている地球環境の変化を樹木の植生の研究から跡づけるもので、新しい発見の紹介に一同大いに興味をそそられました。当日の参加者は三十名ほどでしたが、講演の後、熱心な質疑応答がありました。

毎年のホームカミングデイのハイライトは、樹木にネームプレートを付けるイベントです。今年も講演の後、梶先生の引率で樹木に学名なども記した板をひとつずつかけました(写真は毛利秀雄会長＝左側＝)。これまでに取り付けた約三〇〇枚とあわせ、駒場キャンパスのかなりの樹木にプレートが付きました。皆さんもこれらのプレートを参考に駒場にどのような木があるか、巡ってみてください。

音楽パフォーマンスのタベ（ペンシルヴァニア州立大学）

三月七日(土)、ペンシルヴァニア州立大学の「ミュージカル・シアター」を駒場キャンパスに迎え、十八号館ホールで音楽パフォーマンスの夕べを開催しました。

公演を行ったのは、同大学の音楽学科の四年生です。この学科はブロードウェイの歌手を多数輩出する全米屈指の名門で、公演活動に力を入れています。今回、日本・韓国・中国・台湾をまわるアジアツアーの一環として、日本では駒場で公演を行ったものです。「コーラスライン」、「ウエストサイド物語」などブロードウェイの親しみある曲をにぎやかに歌い踊る十二名の学生の姿は躍動的で、聴衆を夢中にさせました。タップダンスあり、ショーダンスあり、さらには同大学のスパニア学長も得意のトランプ手品を披露。会場は大いに沸き、参加した多数の会員・会友は、本場のエンターテインメントの醍醐味を満喫しました。

教養学部と「駒場学派」

芳賀　徹

むかし竹山道雄先生が私に下さったお手紙の末尾につぎのような一節がある。日付を見ると、昭和五十八年(一九八三)二月七日とあるから、先生が八十一歳で亡くなられる一年前の私信ということになる。

「駒場の教養学部は何といっても懐かしく、ここから新しい学風が生まれて、西洋の大学にあるような、駒場学派といったような、独立した自由な精神拠点ができるといいが、と思っています。」

これは生涯にわたって駒場を愛しつづけた竹山先生の、駒場への最後の遺言というようなものでもあったろうか。先生は大正十五年(一九二六)東大独文科を卒業するとすぐに、弱冠二十三歳で母校一高(旧制)のドイツ語教師となり、それ以来、昭和二十六年(一九五一)に教養学部教授を依願退職なさるまで、本郷で、やがて駒場で、若者たちに語学と教養の教育をとおして、時流に抗する智慧と勇気を与えつづけた名物教師の一人であった。

先生は駒場退職後も、みずから創設にかかわった教養学部教養学科で、非常勤講師として「近代思潮」や「ファウスト講読」などの授業をもたれた。私自身は旧制一高最後の文乙のクラスで先生にドイツ語初級文法をお習いして以来、この教養学科でも第一期生として他の多くの旧制仲間とともに先生の授業に出つづけた。私たちが昭和二十八年春、新制大学最初の「教養学士」として卒業する頃、某週刊誌の「今年のホープ」とのアンケートに答えて「教養学科卒業生五十何名」と書いて、不安だらけの私たちを励ましてくれたのも竹山先生だった。

先生との親交は、その後の私たちの留学や就職をへてもかわることなく、先生の著作や私たちの研究論文などが公刊されるたびにむしろ一層深まって、先生の没年までつづいた。冒頭に引いた先生の手紙も、高橋英夫氏や平川祐弘、粕谷一希、清水徹、それに本間長世や私など旧門弟が集まって「竹山道雄著作集」全八巻(福武書店)を編集・刊行中に、その仕事への謝辞をも含めて頂いた文面だったのである。

さて、先生が期待したような「駒場学派」は、その後ほんとうに成り立っただろうか。私は十分に成立したと信じている。いうまでもなく駒場は後期課程としての教養学科をもつことによって、全国立大学のなかでも唯一の教養学部として今日まで存続し発展してきたが、その教養学科を知的国際派の養成機関とし、さらにその上に私たち第一期生の卒業と同時に創設された国際関係論、比較文学比較文化、科学史科学哲学、文化人類学などの大学院を「独立した自由な精神拠点」として、「新しい学風」は明らかに駒場に生まれ、各分野でめざましい成果をあげてきたのである。

いまなお、全国の国公私立大学を見渡しても、教養学科や大学院の右のような専門課程をもつ大学は東大駒場以外にない。海外諸国にさえ珍しい。「駒場友の会」は単なる親睦団体の域をこえて、この駒場の駒場たるゆえんを大いに顕揚し、近年の高等教育の危機に際して、少なくとも知的エリートに対するリベラル・アーツ教育の徹底を広く声高く唱導すべきなのではなかろうか。もはや周辺に気がねしている余裕は許されないだろう。

敗戦直後の教育改革に半ば乗じ、半ば抵抗しつつ、旧制高校のよいところを十分に生かして、駒場に教養学部と教養学科、そしてあの尖端的大学院を創設した昭和二十年代の駒場の教授たちの先見の明と行政手腕の妙をも、私たちはことあるごとに想い起こし、感謝しなければならない。それは矢内原忠雄初代学部長を先頭にした、前田陽一、麻生磯次、木村健康、玉蟲文一といった有能無比の教授たちのチームであり、それを当初から支えた竹山道雄先生をはじめ菊池榮一、堀大司、島田謹二、市原豊太といった旧制一高以来の大先生方がこの学科にありたけの智慧と情熱を傾けて下さったのである。

近年、いつからか、教養学科をただ後期課程と呼ぶようになったそうだが、まるで色も香りもない陳腐にして愚劣な改名ではないか。教養学科と駒場大学院草創の頃のあの大先達たちの高邁な志と必死の気概とを想い起こせば、到底許し難い改悪だ。名誉ある「教養学科」の復権と「駒場学派」のさらなる隆盛のために、われらの駒場友の会も大いに奮起しよう。

(東京大学名誉教授、岡崎市美術博物館館長)

駒場友の会への感謝と期待

小島　憲道

私は二〇〇七年二月十六日に木畑洋一先生の後を受けまして大学院総合文化研究科長・教養学部長に就任し、二〇〇九年二月十五日に任期を終えましたが、部局長の任期終了に際し、駒場友の会の皆さまにお礼を申し上げたいと存じます。

駒場友の会は二〇〇四年三月に、旧制第一高等学校時代から駒場キャンパスで育まれてきたリベラル・アーツの精神を愛し発展するため、駒場キャンパスを愛する人々の集いとして設立されました。駒場友の会が設立された時期は、国立大学が法人化となる時でありまして、東京大学大学院総合文化研究科および教養学部は教育研究面でも施設面でも大きな変革の時期を迎えていました。

教育研究面では、新学習指導要領のもとで教育を受けた最初の学生が入学する二〇〇六年度に前期課程カリキュラムと進学振分け制度の大幅な改革を行いました。また、教養教育開発機構や様々な寄付部門を設置したこと、教養学部で培った教養教育を東アジアに発信するため東アジア・リベラルアーツ・イニシアチブを設置したこと、科学技術インタープリタープログラムやグローバルCOE(共生のための国際

哲学教育研究センター)の設置などが思い出されます。

施設面では、PFI事業による駒場コミュニケーションプラザが完成し、これが日本の建築業界で最高の賞であるBCS賞に選ばれたこと、スタインウェイ社製フルコンサートグランドピアノの導入、一高時代から受け継がれてきた教養学部正門の復元竣工、駒場池(一二郎池)の整備、「理想の教育棟」第I期棟の着工、駒場バラ会のご尽力による「駒場バラの小径」の設置なども印象的です。特に教養学部正門につきましては、駒場友の会、一高同窓会、ベテラン会の方々から多大なご寄付を頂き、復元竣工が実現しましたことに心より感謝申し上げます。

今年は教養学部創立六十周年を迎えますが、これを機に駒場美術博物館において、学部の草創期と矢内原忠雄初代学部長を回顧する展覧会「矢内原忠雄と教養学部」展を三月末から三ヶ月間開催します。

このように、駒場キャンパスは、一高時代から受け継がれてきた有形の文化遺産と無形の文化遺産であるリベラル・アーツの精神、東京帝国大学農学部時代から受け継がれてきた緑豊かな自然のなかで教養と文化の香りのするキャンパスとして成長してきましたが、法人化以後の駒場キャンパスのめざましい発展には、駒場友の会が側面から支援して下さいました。改めて感謝申し上げます。

駒場友の会は、東京大学の駒場キャンパスとゆかりのある方々の連携と親睦をはかるとともに、駒場キャンパスで展開されている教育、研究、文化、スポーツ活動などの活性化を後援するための団体ですが、会友である在校生の家族の方々も含めますと二千人を超える規模に成長してきました。

駒場友の会には今後とも、緑と文化豊かな駒場キャンパスの発展に一層ご支援いただきますようにお願いします。また、演奏会・イベントなどの機会に、多くの会員・会友の皆さまが駒場キャンパスをお訪ね下さいますようお待ちしています。

(大学院総合文化研究科教授　前教養学部長)

「矢内原忠雄と教養学部」展

木畑　洋一

本年五月三十一日に東京大学教養学部が創立六十周年を迎えるにあたり、駒場博物館で、三月二十八日(土)から六月二十八日(日)まで、「矢内原忠雄と教養学部」という特別展が開催されます。駒場友の会もその共催団体となっています。

矢内原忠雄(一八九三－一九六一)は、教養学部創設時の初代学部長として、学部の基盤作りに大いに貢献した人物ですが、同時に、真摯なキリスト者として多くの人々に影響を与えたこと、また日本の植民政策について広範な批判的研究を行ったことによっても、よく知られています。そこで、この展覧会では、「矢内原忠雄の人と信仰」、「矢内原忠雄の学問」、「教養学部の出発」という三本の柱を立てて、矢内原の生涯と業績を振り返ることにしました。

矢内原忠雄は、愛媛県で生まれ、兵庫県立神戸中学校、第一高等学校を経て、東京帝国大学法科大学を一九一三年に卒業しています。一高では、芥川龍之介、菊池寛、久米正雄などと同じ学年でした。当時の校長は新渡戸稲造で、矢内原は新渡戸をあつく尊敬し、入学式での新渡戸の演説を筆記したノートは、後に『余の尊敬する人物』(一九四十年)に発表されることになります。一高時代、矢内原はさらに内村鑑三にも大きな影響を受け、キリスト者としての道を歩むようになりました。

本特別展の第一部では、このキリスト者としての矢内原の姿に焦点をあてながら、彼の生涯をたどっていきます。矢内原は、大学卒業後、新居浜の住友別子鉱業所に就職しますが、三年後に東京帝国大学経済学部の助教授として東京に呼び戻され、国際連盟事務局次長就任のためジュネーブに赴任した新渡戸のあとを継いで、植民政策の講義を担当することになりました。しかし、三十七年九月、日中戦争に批判的な含意をもった論考「国家の理想」が問題とされたことにより、同年十二月に教授の職を辞することを余儀なくされ、終戦後の四五年秋に至るまで、教職を離れざるをえませんでした。その間、『嘉信』という個人雑誌を発行したり、自宅で土曜学校を開いて、アウグスティヌスの『告白』やダンテの『神曲』を講じたりするなど、キリスト者としての活動は活発に続けていきました。このような軌跡を、第一部ではぜひご覧になっていただきたいと思います。

矢内原の学問を扱う第二部では、植民政策や帝国主義をめぐる彼の研究の内容が、紹介されます。植民政策に関する矢内原の研究は、植民政策・帝国主義全般に関わるものと、特定の地域を対象としたものとに大別されます。前者を示す本が『植民及植民政策』で、

後者については、『帝国主義下の台湾』、『満洲問題』、『南洋群島の研究』、『帝国主義下の印度』が代表的著作です。

この特別展では、こうした代表的著作そのものに加え、研究ノートや原稿など、彼の研究が完成していく過程を垣間見せる素材も展示します。また矢内原は、台湾、満洲、南洋群島についての研究に際し、現地に調査旅行に出かけてさまざまな情報と資料を集めてきました。とりわけ、一九三十三年と三十四年に二度行った南洋群島調査旅行からは、珍しい民俗資料も多く持ち帰っています。こうした資料は、かつてご遺族から駒場博物館に寄贈していただいており、この機会にまとめて展示することになりました。

続く第三部では、もっぱら矢内原を軸とした第一部、第二部と異なり、矢内原自身というよりも、教養学部の創設をめぐる資料の展示の比重が高まります。新制大学の発足に際し、東京大学教養学部は、一般教育を担当する独立した学部として全国で唯一の存在となったわけですが(他の大学では教養部という形がとられました)、その方向性の決定に際しては、南原繁総長などとともに、矢内原も大きな役割を演じました。そして矢内原は初代学部長として、組織や施設の整備を精力的に進めていきました。六十周年にあたり、創設時の息吹を感じていただける資料にこの第三部で接していただければと思っています。

(大学院総合文化研究科教授)

事務局だより

駒場キャンパスでは、梅の花が満開です。うららかな陽気と香りに包まれながらも、入学試験などの年度末の業務が進められ、三月二十四日(火)には卒業式が挙行されます。

多事多用な時期にありますが、駒場友の会でも年度の切り替えに向けて、多数の会員・会友の皆さまから来年度の会費をお納めいただきました。まことにありがとうございます。来年度の会費を納めてくださった方々には、新しい会員証・会友証を同封させていただいておりますので、どうぞよろしくご査収下さい。

駒場キャンパスのニュースを二つお伝えいたします。

ひとつは、キャンパス南東にあります一二郎池の抜本的な整備が進んだことです。この地域は、都心の近くとは思えぬ静寂な自然にあふれ、「秘境」というたたずまいを残していました。今回、教養学部の六十周年記念事業の一環として周辺を含めて整備し、遊歩道などを設置したものです。皆さま、駒場の新しい名所にどうぞ足をお運び下さい。

もうひとつは、駒場友の会と一高同窓会との連携の深まりです。その象徴として、昨年正門門扉の制作に用いられた檜材を利用して看板(表札)を作成しました。(株)禅の石塚静夫氏の作品で、見応えがあります。ファカルティハウス二階の駒場友の会事務室入口に掲げてありますので、ぜひご覧下さい。

駒場友の会第六回総会のお知らせ

日時：五月三十日(土)午後五時より
場所：駒場コミュニケーション・プラザ北館二階

ピアノ演奏会のお知らせ(予告)

ピアノ独奏：
高雄 有希(東京大学文学部在籍、一九九五年シドニー国際ピアノコンクール第1位)
曲目：バッハ、ショパン、リスト、ラヴェル(スタインウェイ社製フルコンサートグランドピアノを使用)
日時：五月三十日(土)午後三時半開演
詳しい情報は追ってお知らせします。

駒場友の会 会費納入のお願い

二〇〇九年度の年会費をまだお納めいただいていない方が若干名いらっしゃいます。年会費は、会員は四千円、会友は二千円です。どうぞよろしくお手続き下さい。
詳しくは、駒場友の会事務局まで。
〇三－三四六七－三五三六

穏やかな日差しの中でゆったりと
くつろぐことのできる
フランス料理
ルヴェ ソン ヴェール 駒場
駒場友の会会員・会友の皆様がお食事の際に
注文なさったコーヒーは、支払いの際に会員
会友証を提示下さいますと無料となります。
営業時間　11：00 ～ 14：30、17：00 ～ 21：00
Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902
駒場ファカルティハウス内

駒場友の会会報　第12号
2009年3月16日発行
駒場友の会
〒153-8902
目黒区駒場3-8-1 東京大学
駒場ファカルティハウス内
電　話　03-3467-3536
FAX　03-3465-3334
郵便振替口座
00170-3-481649
メールアドレス
info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp
ホームページアドレス
http://www.c.u-tokyo.ac.jp/ilovekomaba/
デザイン・印刷　株式会社双文社印刷
http://www.sobun-printing.co.jp